

● 教育実習改革特別プロジェクト ●

地域から学ぶ「へき地・複式教育実習」

Practice-Teaching based on Community

川本 治雄

KAWAMOTO Haruo

植西 祥司

UENISHI Yoji

地域から学ぶ「へき地・複式教育実習」

Practice-Teaching based on Community

川本 治雄

KAWAMOTO Haruo
(和歌山大学教育学部)

植西 祥司

UENISHI Yoji
(附属教育実践総合センター客員教授)

へき地・複式教育実習は、2003年3月に試行、2004年、2005年の教育実習としての本格実施で3年を経過した。地域と学校のあり方を体験的につかむことを重視したこの教育実習がどのような成果を上げ、また課題を持っているのかを実践を通して検討した。

キーワード：へき地学校 複式学級 教育実習 地域

1. 「へき地・複式教育実習」実施の経過と目的

和歌山県は、近畿では最多の複式校を有し、更に児童生徒数の減少に伴い、近年複式校が益々増加する傾向にある。本教育学部のへき地・複式教育実習は、そうした地域特性を踏まえ、教員養成の更なるレベルアップを図るために、附属小・中・養護学校及び市内公立小学校教育実習協力校での教育実習に加えて希望実習参加者による教育実習として始めた。

平成14年度は1週間実習として試行的に5日間日程で実施した。ホームステイとしての教育実習をかつらぎ町において行い、美里町での教育実習を美里町のセミナーハウスを使つての合宿による実習として実施した。この年度は、社会体験学習として1単位の認定を申請者に対して行った。このへき地・複式教育実習で特に重視したのは、ホームステイや合宿を通しての父母や住民など地域に住んでいる人たちの活動に触れ、対話を通しての地域理解を図ることであった。学校が地域によって支えられている実態を肌を通して把握してほしいというねらいを掲げての実施であった。

平成15年度からは教育実習としての2単位を認めて本格的実施に踏み切った。本実習は、希望した3回生が県内のへき地・複式校において、その地域にホームステイ又は合宿しながら実習するものであり、全国的にもあまりない取り組みとして注目されている。

試行時の平成14年度には、15名の実習生により、3月3日(月)～7日(金)まで、かつらぎ町・美里町の8小学校(複式校)において実施した。平成15年度は、2月22日(月)～3月5日(金)、実習生

16名、実習校はかつらぎ・高野口・九度山・高野・美里の各町11小学校で実施。16年度は、2月21日(月)～3月4日(金)、実習生は実に41名、実習校もかつらぎ・九度山・高野・美里各町に加えて花園村・清水町・野上町の7町村20小学校で実施した。

平成16年度の実習生が41名(実習該当者の約40パーセントに当たる希望者)と大幅に増加したのは、「①平成16年度の教員採用試験の結果15年度の実習参加学生が現役で合格する割合が非常に高かったこと②本実習が学生間に周知されはじめ、この教育実習体験が学生の意欲を高めたこと」等の理由によるものと推察される。こうした希望者の増加傾向は今後も続くと考えられる。

本実習の主たる目標を次の3点に設定している。

- ①複式学級の授業参観並びに実習授業を通して、複式授業の指導力を高める。
- ②子ども理解をすすめる、家庭や地域との連携の中で子どもを把握する。
- ③地域の中の学校の姿を具体的な活動を通して体験的につかむ。

換言すれば、複式小規模校の教育実習を体験することによって、「へき地小規模校の教育は教育の原点である」という教育の心髄に触れ、「子どもが好き、教育のしごとはすばらしい」という思いを深め、教職へのモチベーションと力量を高めることにある。

2. 地域から学ぶ研修の意図とその成果

実習目標の「①複式授業の指導力の向上、②子ども

理解の習得」については、2週間という短期間ながら、各実習校においてある程度達成できるが、「③地域と学校の連携の体験的な把握」という目標達成については、卒業式間近の学校行事の少ない時期でもあり、14年度・15年度の実習では十分満足のできるものではなかった。ただ、全員がセミナーハウス「未来塾」に合宿した美里町では、13年度の試行当初から第③の目標を念頭に置き、みさと太鼓及び太極拳の体験、老人会とのゲートボールを通じての交流等、様々な校外での活動を通して、学校と地域の深い結びつきについて研修してきた。

伊都地方においては、実習の全てはホームステイ型であったこともあって、15年度に「信太小学校学習発表会の見学」のほかは、地域と学校の連携を探る企画は行わなかった。その課題は、全てホームステイ先と各校に委ねていたと言える。

例えば、実習期間中に「餅つき大会」や文化フェスティバルを開催するなど地域・PTAとの連携に基づく学校行事を特別に企画し、実習計画に位置づけ展開するという学校もあった。

また、多くのホストファミリーでは、時には隣人を招き、実習生とともに歓談しながら、地域や学校への熱い思い・子どもへの深い愛情等を語ってくれた。特に大切にしたい観点は地域の中における学校の位置を地域住民の語る言葉の中に実感できる活動の展開である。

たとえば、平成15年度花坂小学校に実習に行き、ホームステイ先の掛正和さん宅から2週間学校に通った実習生のY.D.君は、次のようにコメントしている

掛さんは、区長や教育委員をするなど非常に花坂のために努力されている人でした。私は、掛さんから非常に多くのことを学びました。最も印象的なことは、掛さんが心から花坂を愛し、花坂の将来のために日々の生活を送っている姿でした。(中略)花坂の地域の中心に小学校を位置させ、地域の様々な行事を小学校とその周辺で行っています。そのため、自然と地域の人たちにとって、学校は親しみのあるものとなっているのではないかと思います。地域が学校のことを考え、学校が地域のことを考えることが出来ていて、そのような連携をこの目で見る事ができて、大変勉強になりました。

しかし、こうした豊かな体験を全ての実習生が得たかという点、地域や学校によってその成果は様々である。そこで、平成16年度は、特にホームステイ型の教育実習にとって、「地域と学校との連携を体験する」という第③の目標達成のための校外での活動の立案を大きな課題として取り組みをすすめた。

3. 地域から学ぶことの今日的意味

本来、時代を担う健全な主権者を育てるために、その根幹をなす学校教育は、最重要視されなければならない国家的事業であり、各家庭・地域・教育行政機関との密接な連携のもとに、子ども達一人ひとりに豊かな教育環境を保障することが学校教育の望ましい姿である。しかし、義務教育もまた民営化・地方化の流れにあることは明らかである。教育は国家的事業だとして、国に頼る時代は終わったと言える。学校・保護者・地域・行政はまさしく一体となり、全力を尽くして育て上げなければならない時期にきている。

しかし、学校と地域と次代を切り開く健全な主人公との関係は、時代とともに希薄になりつつある。更に、「開かれた学校づくり」と言われながら、不審者による学校への闖入事件の増加により、最も安全であるべき学校までが絶えず危険にさらされ、都市部にあっては校門の施錠を余儀なくされ、地域と学校との自由な交流を妨げる雰囲気すらある。だからこそ、保護者・地域と学校との意識的な連携が一層求められている。

また、子どもの教育への関心が高まる中で、保護者からの学校・教員への要望が厳しくなっている。自分の子ども中心の身勝手な要求もあることから、保護者・地域との接触を忌避し、PTA活動を疎んじる教職員も少なからず存在する。さらに、教職員を取り巻く多忙化の状況は年々深刻化し、子どもを中心に保護者とじっくり・ゆっくり丁寧に育てるという関係が構築しにくくなっている。こうした事態は、子ども達にとっては極めて不幸なことである。

へき地小規模校には、望ましい教育的環境がまだ残されている。今日、「へき地小規模校から教育の光を！」と言われる所以である。教職への出発に当たり、家庭や地域・行政との相互の協力・支援が学校教育上いかに大切かを体験的に認識するのとそうでないのでは、将来教育者としての力量に大きな差が生じる。この教育実習での「地域の中の学校の姿を具体的な活動を通して体験的につかむ」という第③目標を設定し、重視している理由はそこにある。

4. 平成16年度 地域から学ぶ研修プログラム

学校における教育実習と並行して「地域から学ぶ研修プログラム」を企画・立案・実施した。このプログラムは、附属教育実践総合センターの植西・豊田が担当し、それぞれの地域に深く関わって実践を展開してきた方々を講師に招いて、地域の人とのふれあいを通じた展開となるよう工夫したものである。具体的には、地域の特徴的な施設や特色ある学校の実践をはじめ、生涯学習や社会教育として取り組まれている活動に大学生として参加したり、ともに活動するなどの体験を

通した研修を中心としたものである。

また、実習校のある地域によっては歴史的な伝統行事に触れ、行事を通じた地域での子どもと住民のふれあいから学んだり、青少年の健全育成という観点から地元の青年たちとともに活動したりするなかで学んだりするものにも取り組んだ。これらの取り組みは、学校の教育活動をサポートしている姿に、直接関わった

りするなかで、学校では体験できない地域とのかかわりを学ぶ機会を提供するものとなった。さらに、ボランティアによる植林後の山のしごとを体験するという「葛(くず)退治(葛のつるを切る)などのユニークな活動も取り入れたものもある。

全体のスケジュールと概要をそれぞれの地域ごとにまとめると以下のようなになる。

◎地域から学ぶ研修プログラム①(美里町・野上町・・・合宿型)

2月23日(月)	19:30～	講話「美里町の情報化政策と教育」 (和大講師 豊田充崇：美里中学校での実践をもとに)
2月26日(木)	19:30～	みさと太鼓体験
2月27日(金)	20:00～	みさと天文台見学
2月28日(土)	10:00～	生涯スポーツ体験(老人会とのゲートボール)
3月1日(月)	19:30～	社会教育体験(大正琴, 太極拳)

◎地域から学ぶ研修プログラム②(清水町<花園村を含む>・・・ホームステイ型)

※ 伝統芸能(随時参加)	実習期間外での対応
清水町久野原	御田の舞…2月11日(金)
花園村梁瀬	御田の舞…2月13日(日)

2月22日(火)	15:30～	講話「清水町の歴史と概況(二澤久雄氏)」 「花園村の歴史と概況(浦中教育長)」
2月25日(金)	14:00～	和紙紙すき体験(清水町高齢者生産活動センター)
	19:00～	講話「へき地教育は、教育の原点(上田盛雄氏)」
	21:00～	実習体験交流会
2月26日(土)	9:00～	花園名所めぐり
	10:00～	花園村お年寄りとの交流(紙芝居, 童謡, ゲーム, 意見交流等)

◎地域から学ぶ研修プログラム③(伊都地方<花園村を除く>・・・併用型) ※合宿型のみ

-
- 富貴小(3名) 2月19日(土) 8:00～ 「ウインター・フェスティバル」に参加
富貴小学校はこの行事に参加するため実習を1日早めて実施
-

2月22日(火)	15:30～	講話「町の歴史と概況」・かつらぎ町井本総務課長 ・九度山町池田社会教育課長 ・高野町佐古観光推進室長
	※ 19:00～	リクレーション活動(青少年の家, 山本・池田指導員による)
2月23日(水)	※ 19:00～	「四郷千両太鼓」体験 ・四郷小実習生も参加
2月25日(金)	14:00～	和紙紙すき体験(九度山町「紙遊苑」にて)
	19:00～	講話「伊都地方と高野山」(県文化財保護指導委員北川秀臣氏)
	21:00～	実習体験交流会
2月26日(土)	9:00～	講話「郷土の自然に親しむ会の取組」(事務局長 巽孝行氏)
	10:30～	「百樹園」植林後の葛退治体験

5. 地域と学校の間を学ぶ実習生の姿

「へき地小規模校の教育は、教育の原点」と言われる理由の一つは、地域と学校は無機的な関係ではなく、地域は学校を支援し、学校は地域の文化の灯台としての役割を果たしているという濃密な関係にあることにある。ここでは取り組まれた事例を紹介する。

○事例1（富貴小学校での実習生のすがた）

富貴小の実習生・男子3名は、借家を借りて合宿していた。その家主さんが毎晩のように夕食に誘ってくれた。また、地域を挙げて、「わがらの学校」にきた実習生を自分の子や孫のように可愛がってくれ、代わるがわる夕食に招待して頂いたという。いかに学校が地域の中心的存在をなすものかということ、3名の実習生達は体感できたと思う。

○事例2（四郷小学校での実習生の姿）

かつらぎ町立四郷小は、実習時期の問題等の理由から、15年度は実習生を引き受けてもらえなかった。しかし、16年度はいち早く2名の実習生受け入れを表明してくれた。16年3月のNHK特集「地域密着で教育実習」のテレビ放映を見ておられた平成16年度PTA会長・中辻秀敏氏が「俺ここがホストファミリーを引き受けるから」と校長先生に進言されたと言う。その中辻氏ら地域の青年達の手によって、青少年の健全育成のために10年程前に「四郷千両太鼓」が創設された。毎年町の大ホールで定期演奏会を催し、既に台湾への海外公演まで果たしている。また、毎週1回放課後小学校に出向き、希望する児童に太鼓を教えている。実習生たちと共にその夜間稽古風景を見学・体験させて頂いた。今では、四郷地区のみならず近隣市町村・峠を越えた河内長野市からの老若男女のみならず海外から来られ滞在している人も加わり、高校生から初老までの会員が大小さまざまな太鼓を前に、力強いバチ捌きを披露して頂いた。

教育実習が終了した翌日の3月5日（土）に定期公演がかつらぎ町あじさいホールで開催された。1地区の発表会だというのに、1,000人収容できる大ホールはほぼ満員となった。当日実習生2名も中辻氏からの誘いで、揃いのハッピーを着て、スタッフとして走り回っていた。太鼓演奏だけではなく、三味線演奏があり、マツケンサンバを挿入した寸劇があり、それは四郷の人たちの絆と土の匂いがする、いつかどこかに置き忘れてきた懐かしく優しいふるさとの香りがするものであった。太鼓演奏のほかは、決して完成したものとはいえない、しかし、感動に震えた。恐らくは四郷人の並々ならぬ熱意の槌音が胸を打ったのだと思う。地域の宝である子ども達を

取り囲むようにして、地域再生に賭ける「四郷千両太鼓」一実習生は、地域の人々の郷土への熱い思い・学校教育への熱い期待を知り、学校がどう応えるべきかを学んだと思う。今年度転出された四郷小前校長・池田弘男氏がぼつりともらされた「退職まで『四郷千両太鼓』と一緒に居たかった」という言葉が忘れられない。

○事例3（伊都郡内の実習生たち15名の姿）

伊都の実習生たち15名は、2月26日（土）の朝、高野口町嵯峨谷の山の上のてっぺんにいた。広葉樹百種類700本の「百樹園」の葛退治を体験するためである。紀北青少年の家で、事務局長・巽孝行氏から「郷土の自然に親しむ会」の趣旨や活動について講話を受けたあと、山頂で会員と合流したのである。「親しむ会」は、元高校教員の藤範順誠氏とその同級生を中心に平成12年に組織され、現会員数23名、活動目標の1つに「50年先、100年先を見通した活動を行い、次代を担う子ども達に優れた自然環境を残すことを目指します」とある。今は学校とは直接関係ないにしても、子ども達の幸せを願い、地道に活動を続けるいくつものこうした団体があること教員が知り、教材化することで、温かい心と郷土愛を持つ子ども達を育てることが出来ると思う。

ここでは3つの事例を紹介したが、学校を支え、次代の健全な主権者を育て、伝統芸能や各種ボランティア活動・四季折々の地域行事等の生きた教材は、へき地小規模校の周辺には数多く存在する。平成16年度の41名の実習生は、こうした校外活動によって、教育実習第③目標の、学校を支える保護者や地域の人々の温かさ・意気込みと学校の果たすべき役割を学ぶことが出来たのではないと思う。

6. 課題解決のための取り組みの評価体制づくり

平成16年度は、伊都地方・清水町における各実習校への学校外での研修スケジュールの連絡が遅れた。「短期間ながら、出来るだけ多くの実習体験をさせたい」とする各校のご好意と大学側の立案したスケジュールがバッティングして、無理が生じた。そのために、実習校からは、「学校外スケジュールが多すぎる」、実習生からは、「教材研究の時間が無い」との批判があった。もっと早くから実習生・実習校に研修の具体案を提示しておく必要がある。

また、大学側が立案する勤務時間内での校外での活動は極力避ける等の配慮があることがあげられる。したがって、学校外での研修内容を精選・割愛する必要がある。いまま少し、理論化し、「地域の中の学校の姿を具体的な活動を通して体験的につかむ」という実習

の第③目標にぴったり合致したものに精選していく必要がある。

過去3回の実習を通じて、この第③目標の課題達成が一番困難だった。校外での研修を割愛する分、各実習校やホームステイ先に、例えばPTA活動や地域の伝統芸能・教育的ボランティア活動等を紹介頂き、接触・研修できる機会を作って頂くよう働きかけることが一つの解決策となるであろう。

7. へき地・複式教育実習フォーラム ＜地域教育フォーラム＞の開催

地域における取り組みの成果をその地域だけでなく広く共有すると共に、課題を整理し、課題解決に向けての意見交流を活発に行うという目的のもとに、地域教育フォーラムを企画・実施した。

へき地・複式教育実習は小学校区の家庭に教育実習の期間宿泊しておこなうホームステイ型と地域の中の公共宿泊施設を利用しそれぞれの学校に通うという合宿型の2種類の宿泊形態で実施し、実習期間中が地域とのかかわりで運営されるという特徴がある。それだけに、学校での教育実習プログラムとは違うもう一つのプログラムがあり、前述した「地域から学ぶ研修プログラム」がこれに相当する。さらに、隠れたプログラムとも位置づけられるプログラムがある。それは、意図的・計画的ではないものの実習生に多くのインパクトを与えてきた。具体的に言うならば、ホームステイ型に置いてはステイ先の家族との生活である。学生としての日常生活とは全く違った環境での生活は、一面、とまどいや困難を伴うが新しい出会いの中で自らを鍛える場となる。一方、合宿型の共同生活に置いては、教育実習という目的のための宿泊を通して、実習生として参加している学校や教室の様々な情報の相互交流の場となり、附属学校や、和歌山市内公立学校での教育実習とは違った自主的な実習生同士の学び合いの機会となった。

このような個別的・具体的な「学生の学びの姿」の一部は、今まで報告書の中で取り上げるだけにとどまっていた。そこで、地域フォーラムとして実習校の教員や実習生、大学教員だけでなく地域の方々が一堂に会し、へき地・複式教育実習の効果を確認し課題解決に向けて取り組む機会を持つことにした。

2005年2月11日(祝日)に「へき地・複式教育実習フォーラム2005 IN かつらぎ」(へき地・複式教育実習フォーラム)を開催した。「へき地・複式教育実習を考える」といテーマをかかげ、以下の趣旨のもとにおこなった。

へき地・複式教育実習を通して地域における教育実践の意義を振り返ると共に、地域における教育に

関わる広範なニーズを探り、教育実習をはじめとした教員養成のあり方についての意見を交流する。また、へき地・複式教育実習をとおして、実習生が地域と学校のあり方を具体的な実践を通して学ぶ効果的な取り組みについて考え、現代の教育課題へのアプローチを地域と大学の協働によって進める機会とする。

このフォーラムの主管は教育実習委員会と附属教育実践総合センターであったが、主催は和歌山大学教育学部としての位置づけでおこなった。2004年度のへき地・複式教育実習は、2月21日から3月4日(2月下旬から3月初旬の2週間)にかけての期間で行う予定であったので、この年の実習参加予定の学生や前年度の実習生にも働きかけて開催したものである。

開催場所については、へき地・複式教育実習の実習校を当初から受け入れ、2004年度で3年目の実習になる「かつらぎ町」での開催で、かつらぎ町総合文化会館研修室を会場とした。地域との接点をできるだけ持ちたいという趣旨から、大学のキャンパスから外へ出かけての開催である。

当日は、当初から積極的な実習の受入を表明された地元教育委員会を代表して内田勝巳かつらぎ町教育委員会教育長より開会に際しての挨拶を頂いた。内田教育長は地域の公立小学校での少人数・複式学級での教育実習を通しての教員養成の意義とともに、地域においては実習生による学校の活性化・地域の活性化に触れられ、これまでの実習の成果を述べられた。

引き続いて、三つの報告をおこなった。まず、第1報告では、「これまでのへき地・複式教育実習の取り組みと課題」と題して和歌山大学高須英樹教育実習委員長から、大学側の取り組みによる成果の確認と明らかになった問題点や課題を報告した。第2報告は、「昨年度(2003年度)のホームステイ型教育実習の状況<ビデオ>」を上映することによって、『ホームステイ型へき地・複式教育実習』を映像を通して行った。これは、NHK和歌山放送制作「わかやま630」および「ニュース一番」<関西エリア>で放映されたニュース特集番組を使つての報告である。ここでは、地域に生きる人たちの思いを通して教育への期待が熱く語られ、子どもに関わる実習生の姿と共に実習の概要を伝えるまたとない機会となった。第3の報告は、約1年前になる2004年春の実習生の体験から学んだへき地・複式学級での教育実習の事例報告である。

これら3つの報告(基調報告)に引き続き、実習校の校長・実習指導教員・PTA代表・ホームステイ受け入れ家族の4者それぞれの立場からへき地・複式教育実習についての意見を出し合い、実習の意義や取り組みの課題についてパネルディスカッションで討議を深めた。パネラーとして、教育実習校校長の立場から

谷口守校長（かつらぎ町立新城小学校）、実習指導教員を代表して西浦民子教諭（美里町立上神野小学校）、地元のPTAを代表して中辻秀敏PTA会長（かつらぎ町立四郷小学校）、そして、ホームステイ受け入れ家庭を代表して2003年度お世話になった掛正和氏（高野町花坂小学校区在住）の4名である。なお、コーディネーターは附属教育実践総合センターの松浦善満センター長が努めた。

かつらぎ町で開催された、へき地・複式教育実習フォーラムの参加者やパネルディスカッションの内容からみると、次のような特徴が浮かび上がる。

- ①参加者の約半数を地元伊都郡内の先生・住民の参加者が占め、へき地複式教育実習を初めて3年目を迎える本年の取り組みにふさわしい第1回のフォーラム開催となったこと。
- ②パネラーにそれぞれの立場の代表者を迎え、一堂に会して、取り組みの成果と課題を確認することができ、積極的な提言などをいただけたこと。
- ③大学側からは、教育実習関係教員以外の教員の参加を得ることができ、今後の取り組みの広がりや深まりに一定寄与できたこと。
- ④実習生の実習成果を、実習生の立場からだけでなく、パネラーのそれぞれの立場から指摘頂くと共に、学生についての課題にも触れて頂き、今後の学部教育のあり方を展望する上でも参考になったこと。
- ⑤附属教育実践総合センターや教育実習委員会のスタッフをはじめ地域の各方面の方々の協力により開催でき連携の意義が確認できたこと。

また、同時に、このフォーラムを通して次のような検討課題も確認した。

- ①2月下旬から3月初旬という学校側にとってはそれぞれの学年の最後のまとめの時期と重なり、実習時期としてはふさわしくないこと。(大学の教育課程全体の中で希望者に教育実習を行うには、この時期以外には適切な時期がないこと)
- ②ホームステイ型・合宿型の宿泊のための負担が大きく、特に、ホームステイ型における受け入れ家庭の精神的なケアもふくめた意思疎通を今後も図りながら進めること。(実習生の有意義な体験が、受け入れ家庭にも伝わるようなシステムを構築すること)
- ③実習校での教育実習の内容やスケジュールおよび実習校以外での地域でのスケジュールの調整を図り、効果的な複式学級・少人数学級での実習体験が可能な条件を整備すること

このように、へき地・複式教育実習フォーラムを通して、学校、指導教員、ホームステイ受け入れ家庭、大学教員等が一堂に会して、その成果と課題を確認し「地域で育てる教員養成」をめざして取り組むことは、非常に大きな意義がある。このような機会での貴重な意見を生かしながら実習の検討を進めていきたい。また、このようなフォーラムを大学の取り組みへの重要な評価の場としてとらえ、今までの取り組みの改善に向けて努力していかなければならない。

まとめにかえて

へき地・複式教育実習は、応募者が今後も増えるものと予想できるが、地域（学校外）での活動についても、実習生の要望も取り入れて、更に充実した研修内容にしていく必要がある。

そこで、この取り組みをPLAN-DO-SEE-ACTIONのサイクルに位置づけ、評価を生かした教育実習の企画・立案になるような組織的体制づくりを意図して、へき地・複式教育実習フォーラムを継続して実施しなければならない。今回は、平成16年度の教育実習直前の17年2月の実施となったので、16年度実習には直接生かせなかったことも多々あるが、成果の共有だけでなく課題を明らかにして解決に向けた取り組みを推進する足がかりを得た。

へき地・複式教育実習を地域と大学をつなぐ組織的な取り組みの一つとして定着させる必要がある。

参考資料

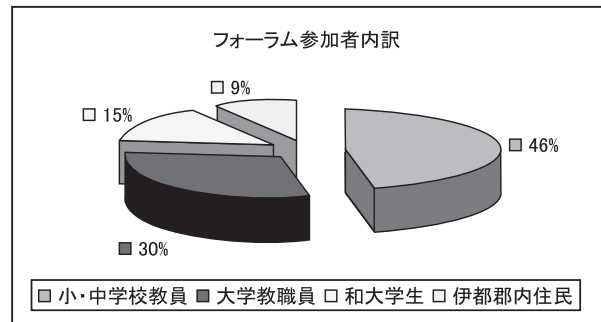
- (1)平成14年度学長裁量経費報告書「教育実習カリキュラム開発に関する総合的研究－附属小中養護学校、県教委との共同研究」和歌山大学教育学部教育実習委員会2003年3月
- (2)平成15年度「へき地・複式学級教育実習の取り組み－実習カリキュラムの改革にむけて－」和歌山大学教育学部教育実習委員会・附属教育実践総合センター2004年6月
- (3)有馬毅一郎『へき地・複式教育の基礎的研究』黒潮社 2003年3月

資料1

へき地・複式教育実習フォーラム参加者内訳

小・中学校教員	*	22
大学教職員		14
和大学生		7
伊都郡内住民		4
合計		47

*和歌山大学附属小学校の複式学級担当の先生はこの分類に入れた



資料2

平成16年度へき・地複式教育実習地域

2005年2月21日～3月4日

実習校20校 実習生41名

